

---

# 軽い男 堅い女

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

軽い男 堅い女

### 【Nコード】

N4823A

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

バレー部の洋子にしつこくつきまとう写真部のナンパ男友一。そんな友一に辟易しながらもその心は少しずつ。对象的だけれど一途な二人の恋愛です。

## 第一章

軽い男 堅い女

「ねえ洋子君」

「うっさいわね」

今日も学校の夕暮れの校庭で一組の男女の声が聴こえてきていた。

「デートしようよ、折角一緒になったんだし」

「折角じゃないでしょ」

その少女川口洋子は目の前にいる自分よりもやや背の高い男に忌々しそうに言った。見れば男は黒い詰襟の制服で洋子は上が白、下は青の可愛らしい制服を着ている。かつてのセーラー服でもブレザーでもなく左で完全に止めた何処かウィーン国立歌劇場のボーイの制服を思わせるものであった。スカートの丈は今時の女子高生らしく短い。それを着こなす洋子は黒く長いロングヘアにはつちりとした黒い目に小さく赤い唇を持つ美しい少女であった。背はあまり高くはないが手足は長く胸も大きい。この学校の女子の中ではとりわけ可愛いと評判であったのだ。

彼女は今二年生でバレーボール部に所属している。次期部長という声もあがっている。優しく面倒見のいい性格で誰からも好かれている。そして彼女自身誰に対しても優しくかった。ただ一人の例外を除いては。

「大体いつつもいつつも私につきまとして。少しはどっか別の場所に行ったら」

「そうは言っても」

その男稲富友一はそれを聞いて困ったような顔をした。見ればほつそりとして和風の整った顔をしている。だが落ち着いた感じはない。何処か軽薄な雰囲気の漂う男であった。

それもその筈この男はこの学校ではかなり有名なプレイボーイであったのだ。可愛い女の子と見れば誰彼構わず声をかける。ふられ

てもすぐに別の女の子に声をかける。こうして学校では有名人になつていたのだ。当然いい意味ではなかった。そのせいかその黒くて綺麗な髪と和風の涼しげな顔立ちでも女の子に評判はよくなかった。黙つて動かなければいいのに、とさえ陰口を叩かれていたのだ。

「俺君が帰るところを見たからさ」

「たまただだつていうの!？」

「うん」

友一はそう答えて頷いた。

「たまたまだよ、本当に」

「ふうん」

だが洋子はそれを聞いてそのぱつちりとした目を細くさせた。するとやけに幼く、それでいて大人びた不思議な顔に見えた。

「じゃあ体育館ですつとバレー部の練習見ていたの誰かな」

「誰なんだろうね」

彼はそう言つてすつとぼけた。

「それは男なの女なの？」

「男を」

洋子は言った。

「それもかなりスケベでしつっこい男ね。全く腹が立つわ」

「それは悪い奴だな」

友一はそれを聞いた憤慨した顔を作つた。作つたのである。

「洋子君につきまとうだなんて。とんでもない奴だ」

「ところでさ」

「何？」

「バレー部の練習の時の服装知ってる？」

「勿論さ」

彼は満面に笑みを浮かべて頷いた。

「ジャージだろ」

「そう。それで試合の時は？」

「青い上着に半ズボン。何か寂しいよね」

「どうして寂しいの？」

「ブルマーじゃないからさ。折角洋子君の綺麗な両脚を見たいのに」  
「いい加減にしなさいっ」

そう言ったところで洋子はその手に持つ鞆を振った。

「白々しい。最近いっつも体育館にいてバレー部をのぞいてるわよね」

「あいたたたたたたたた……」

頭を思いきり叩かれた友一はその頭を抱えて呻いていた。

「本っ当に。ちよつとは人の迷惑を考えなさいよ」

「あれ、照れてるの？」

「……何でそうなるのよ」

洋子はその言葉を聞いて顔を顰めさせた。顰めるとその目が微かに歪んだ。

「だつてさ、洋子君顔が赤いんだもん」

「えっ!？」

そう言われて本当に顔が赤くなった。

「それがどうしたっていうのよ」

その赤くなつた顔のまま友一に文句を言う。

「私はね、元々顔が赤いのよ。それがどうしたっていうのよ」

「ほら、嘘ついて」

「嘘って」

「洋子君いつもは顔が赤くないよ。何なら証拠見せようか？」

「証拠って」

「ほら」

彼はここで懐から何かを取り出して洋子に見せた。それは彼女の数枚の写真であった。制服を着たものやバレー部の練習の時のジャージ姿、私服で遊んでいる時のものもある。

「な、何であんたがこんなの持つてるのよ」

洋子は自分のその写真を見てその顔をさらに赤くさせた。

「だつて洋子君可愛いんだもん」

友一は答えにならない答えを返した。

「ついつい写真でも見たくて。何ならあげようか」

「勿論よ」

洋子はそう言って友一からその写真を奪い取った。

「全く。油断も隙もないんだから」

「隙は見つけるものだな」

「どういうこと？」

「洋子君のことはいつも僕が見ているから。だから隙だってわかるのさ」

「馬つ鹿馬鹿しい」

「たまりかねてそう言った。」

「今度こんなことしたらストーカーで訴えるからね」

「それは本望だね」

やはりくじけはしない。

「洋子君に認めてもらったんだから。いつも側にいるって」

「……ふん」

「じゃあ一緒に帰る？」

「私は嫌よ」

「プイ、と顔を背けてそう言った。」

「あんたみたいな軽薄な男、大嫌いよ」

「そんなに嫌い？」

「ええ」

露骨に嫌悪感を露わにして言った。

「口も聞きたくないわ。だからもう話をしない」

「けれど僕の話は聞いてくれるね」

「ふん」

顔を背けたまま口も聞こうとしない。だがそれでも友一は口を開いた。

「それじゃあ話を聞いてね。あのね」

洋子は口を聞かない。それでも友一は何だかんだと話をしながら

軽い男 堅い女

洋子の後をついていった。そして一人は学校を後にしたのであった。

## 第二章

家に帰って洋子は制服を脱いで夕食を食べた後でシャワーを浴びた。それからパジャマを着て自分のベッドの上に寝転がった。寝転がったままふと考え込んだ。

「一体何なのよ、全く」

考えることは友一のことであった。

「いつもいつも私の側にいて。鬱陶しいったらありやしないわ」

思うだけで忌々しかった。友一のこととは前から知っている。

「一回振ったらすぐに離れていくって聞いていたのに」

それは今までの友一であった。彼は振られるとすぐに別の女の子に声をかけてきたのだ。だからこそ女の子達からは受けがよくなかったのだ。あまり軽薄だとかえってもてないのは何時でも何処でも同じなのであるうか。

「それがどうしてずっと私の側にいるのよ。おかしいじゃない」

どう考えてもわからなかった。振っても振っても彼は来るのだ。

そして今日も側にいた。朝学校に来ると教室に来ているし休み時間になつたら来る。逃げようとしても先回りしている。まるで洋子のことなら何でも知っているように。

「本当にストーカーとして訴えてやろうかしら」

起き上がってそう考えた。だがそれはすぐに打ち消した。

「・・・・・・・・・けれどなあ」

それには少し可哀想な気もしたのであった。

「悪気はないみたいだし」

それだけはよくわかった。写真を盗み撮りされてもそれは決して嫌らしい写真などではなかった。あくまで彼女の笑顔やそうしたものを写したものであったのだ。

それに彼は彼女をそんなに嫌らしい目で見ているわけでもなかった。ただ純粹に声をかけて側にいるだけであった。この年頃にして

は純情であると言ってもよかつた。お互いに凄く意識し合う年頃なのだから。

「それでもね」

洋子にとつて不愉快であるのには変わりがなかつた。

「ストーカーがいい加減にしなさいよ」

そうは言つてもここにはそれに答える彼もない。結局今ここで何を言つても何もなりはしないのであつた。

「寝るか」

悩んでいても仕方がない。寝ることにした。

「お休み」

そして灯りを消した。暫くして彼女は夢を見た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

起きてすこぶる不機嫌になつた。夢にまで出て来たのだ。

「何だつていうのよ、全く」

ブツブツと呟きながら身支度をする。部活の朝練の為に早くに家を出た。その前に朝食を採り、歯を磨いて顔を洗つて髪をすいた。

何故か最近以前よりも身支度に時間がかかるようになっていた。

「何でかなあ」

学校への通学途中洋子はそのことについて考えていた。

「最近朝出るのも遅くなりがちだし。嫌だなあ」

「お早う、洋子君」

そしてここでまたあいつの声が聴こえてきた。

「今日も一段と綺麗だな。何か最近どんどん可愛くなつてきてるよ」

「・・・・・・・・あなたねえ」

洋子は顔を見上げた。するとそこに彼の顔があつた。

「何でこんなところにいるのよ」

「ちよつとね」

「ちよつとじゃないわよ。あなたの部活は朝は何もない筈でしょ」

「うん」

友一はにこにことしてそれに頷いた。彼は写真部に所属している

のである。彼女の写真を持っていたのはその為でもあったのだ。

「じゃあどうしてここにいるのよ」

「それは決まってるじゃない」

彼はにこにことしたままそれに答えた。

「決まってるって?」

「そうだよ。僕はね、洋子君に会う為にここにいるんだよ」

「またそんなこと言って」

それを聞いてその細く緩やかなカーブを描いている眉を歪めさせた。歪んだあまり左右のその眉が輪を描いて& a m p ; # 3 2 3 6 3 : がりそうであった。

「からかうのもいい加減にして」

「からかってなんかないよ」

「それじゃあ何だっというのよ」

「好きなんだよ」

「・・・もう聞き飽きたわ」

一日に何度も聞いている。耳にタコができるといふレベルではなかった。

「馬鹿馬鹿しい。朝から不愉快にさせないでよ」

「けれど僕は気持ちいいよ」

「私に会ったから?」

「うん」

「・・・くっ」

それを聞いて何故か顔がほんのりと赤くなるのがわかった。自分では納得がいかなかった。

「嘘ばかり」

「嘘なんかじゃないよ」

「嘘にしか見えないの、あんなの場合」

そしてそう言い返した。

「私だってね、あんなのことは知ってるのよ」

「洋子君のことが好きなことをだね」

「まさか。あんたがどれだけ女の子に声をかけてきたか。学校で知らない人なんていないじゃない」

「昔はね」

彼は言った。

「けれど今は違うのさ」

「どうだか」

「じゃあ証拠を見せようかい？」

「何？また写真か何かなの？」

「ううん、もつと別のものさ」

「何なのよ、一体」

「ほら」

彼は自分の右腕を洋子に見せた。そこには千切れた輪があった。

「それって……」

「ミサンガさ」

彼は言った。

「これが千切れるとね、願いが適うんだよ」

「聞いたことはあるわ」

「わりかし有名な話である。彼女も知っていた。」

「私は信じていないけど」

「けれど僕は信じているのさ。そしてそれは適うんだ」

「何を願ったのよ」

「決まってるじゃないか」

そう言っつて洋子を見る。

「僕と洋子君がずっと一緒になれるようにつて」

「ばっ」

それを聞いて今までほんのりとした彼女の顔の赤が爆発したように真っ赤になった。

「何馬鹿なこと言っつてるのよ！どうして私があんたなんかと！」

「嫌だなあ、照れなくてもいいのに」

「照れてるんじゃないわよ！あんたなんか大嫌いなんだから！」

「そんなに嫌い？」

「当たり前でしょ！この世で一番嫌い！顔も見たくなんかないわよ！」

「まさか」

「昨日も夢にまで出て！どういっつもりよ！」

激昂してそう叫ぶ。だがここで彼女は一つミスを犯していた。

「夢にまで？」

「そうよ、どうして出て来るのよ」

「幾ら僕でも洋子君の夢のことなんて知らないよ」

「あっ」

それに気付いてハッとした。

「嬉しいなあ、やっぱり気にしてくれていたんだ」

「嫌いなだけよ」

そうは言っても昨日のその夢を思い出すと説得力がまるでなかった。何しろ彼女と彼が夫婦になっている夢だったからだ。だから今朝は機嫌が悪かったのだ。

「けれど気にはしているんだね」

「うっ」

もう反論はできなかった。

「それじゃあ願いは適うんだ。やっぱりそうだったんだ」

「何処をどうやったたらそんな答えが出るのよ」

「それは僕だからさ。洋子君はやっぱり僕が好きなんだそうなんだ」

「………勝手に言つてなさい」

もうこの日は何も言わないことにした。洋子はつきまといてくる友一を無視して勉強と部活に励んだ。だが無視しようとする程彼のことが気になる。そして部活では変に力が入ってしまった。

### 第三章

「まだよ、もう一回！」

レシーブの練習において叫んでいた。長い髪を後ろで束ね、ジャージ姿で練習していた。

「こんなのじゃ。まだ駄目よ！」

「先輩今日はやけに不機嫌ね」

一心不乱に練習に打ち込む洋子の後ろ姿を見て後輩の一人がそう呟いた。

「あの人にいつもつきまとわれてるからね。当然じゃない？」

それに別の後輩が答えた。

「いつもこつちにまで来てるしね」

「そういえばまたいるね」

「ええ」

「お~~~~い洋子く~~~~ん」

また友一の声が聴こえてきた。見れば洋子に向けて手を振っている。

「ミサंगाのこと、よく覚えておいてね」

だが彼女はそれには答えようとしない。あえて無視して練習に励む。

「ミサंगा!？」

それを聞いて後輩達が顔を見合わせる。

「一体何のことなのかしら」

「さあ」

「ほら、そこ」

それを見た洋子の同級生の一人が後輩達を注意する。

「無駄なおしゃべりはしない。練習に集中しなさい」

「はい」

「はい、もっとしつかりと」

「はい」

「宜しい」

見れば背の高い少女であった。目は奥二重で一重にも見えなくはないがその白く細長い顔に合っていて悪くはない。それに黒く長い髪を持っていてそれが実に似合っている。彼女は稲野早苗、洋子の部活仲間であり友人でもある。洋子と一緒にバレー部のレギュラーでもあった。

その早苗に言われると後輩達も私語は止めた。そしてまた練習に熱中しだした。

「よしよし」

早苗はそれを見て満足そうに頷く。だがそれでもどうにかならぬいものもあった。

（それでもこっちはどうしようもないわね」

見れば友一は相変わらず洋子の方ばかり見ている。だが洋子はそれを必死に無視するふりをしていたのだ。

「どうなるのかな、これ」

そうは思っている口には出さない。結局友一はバレー部の部活が終わるまで洋子を見ていたし洋子は無視を続けた。そして部活の後で洋子は部屋に残ろうとしていた。

「彼のことなの？」

それに気付いた早苗が声をかけてきた。

「わかるかしら」

「わからない筈がないじゃない」

見れば二人はもう制服に着替えている。もう何時でも帰ることができる。

「けれどここにいても同じよ」

「それはわかってるわ」

洋子は彼女の言葉に頷いた。

「けれどね」

「けれど………何？」

「あいつ、何でいつも私にまわりついてくるのよ」

忌々しそうにそう言った。

「いつもいつも。確かあいつって一度ふったらもう声はかけてこないのよね」

「私の時もそうだったわ」

「そういえばそうだったわね」

「ええ」

早苗は頷いた。彼女は一年の時に友一に声をかけられた。面倒臭いので断ったらそれで終わりであった。見れば友一は次の日にはもう別の女の子にふられていたのだ。それを見ても特に何とも思わなかった。噂通りとだけ思っただけであった。

## 第四章

「けれど何で私にだけ」

だが洋子はここで俯いて困った顔をしてそう呟く。

「何でなのよ。困るじゃない」

「本当に困ってるの？」

ここで早苗は不意にそう尋ねてきた。

「貴女本当に困ってるの？」

「何言ってるのよ」

そう言われるとこう言い返すしかなかった。

「困ってなければ誰もこんな話しないわよ」

「それもそうね」

頷きはしたがその声には感情が籠ってはいなかった。

「わかるでしょ？早苗は彼氏もいるし」

「付き合って間もないけれどね」

まだ三ヶ月程である。キスどころか手を繋ぐことすらない。

「だから。私はそんなこと今まで一度もなかったし」

「そうだったの」

「そうだったのじゃないわよ。そんな男の子の方から声をかけられ

るのも。あんなにしつこくつきまとわれるのも」

「そんなに嫌だったらストーカーで通報すればいいじゃない」

「それも考えたわよ」

口をシャコ貝の様な形にさせて答える。実に苦々しげな顔になっていた。

「けれど………可哀想じゃない」

「可哀想なんだ」

「そりゃ。あんな奴だけけれどね」

口調がまるで何かを必死に打ち消すかのようなものになっていた。

「それでも。そんなことしなくても」

「それじゃああいつずっと貴女につきまとうわよ」

「わかつてるわよ」

「じゃあ通報しなさいよ。それで万事解決よ」

「解決なんかしないわ」

「あら」

早苗はそれを聞いて一瞬目の色を変えた。だがそれは決して洋子には見せはしなかった。

「そんなことしても。あいつはいいけれど私はよくないのよ」

「貴女がなのね」

「そうよ。気が済まないわ」

「じゃあぶすればいいのよ」

「決まってるじゃない」

洋子は早苗を見上げて言った。二人は部室の左右にあるロッカーを背にし合って向かい合った。

「あいつが私から離れば。それでいいわ」

「それでいいのね」

「それができたらね」

洋子はそう言いながらちらりと横に目をやった。どういっわけかその目の中に自信が影を差していた。

「どんなにいいでしょうね」

「わかつたわ」

早苗はそれを聞いて頷いた。やはり感情は籠ってはいない。

「じゃあ私に任せておいて。彼はこれから貴女の側にはいないわ」

「本当に!？」

それを聞いて顔が晴れやかになる洋子であった。だが晴れやかなものの後ろには陰があったりするものである。

「もし本当にそうなれば」

顔は晴れやかであったが目は何故か泳いでいた。

「もう何もいらぬわ。そうなるのならね」

「じゃあ本当にそれでいいのね」

「ええ」

洋子は頷いた。

「貴女にできることなら。お願いするわ」

「わかったわ。それじゃあ」

そして早苗は言った。

「御礼は後でね。それでいいわね」

「あれ、後でつて」

「すぐにわかるから。それじゃ」

そう言いながら部活を後にした。

「後で呼びに来るから。少し待っててね」

「ええ」

こうして早苗は部室を後にした。洋子は一人になると部室の端に置いてあった椅子に座った。何の変哲もないパイプ椅子であった。かなり古くあちこちに錆があるがそれでも座った。そして考え込んだ。

「本当に大丈夫かなあ」

正直かなり不安であった。

「何かいつも大事な時は早苗に助けてもらってるけど」

二人はそうした関係なのであった。

小学校一年の時に同じクラスになってから付き合いはじまった。遊ぶ時はいつも一緒だったし中学校も高校も一緒であった。部活も中学校でも高校でも同じバレー部であった。早苗は洋子に何かあればいつも黙って助けておくれた。洋子も早苗が困っている時には側にいた。そうした二人であったのだ。

だが今回は何か様子が少し違っていた。早苗はこうした時はいつもなら感情を露わにして相手に飛び掛からんばかりになる。しかし今回は不自然なまでに冷めていたのだ。

「どうしたんだろう、早苗」

それは洋子にもわかっていて。彼女はそれに関して不思議に思った。だがそれでも自分自身のことはわかってはいなかったのである。

早苗に話している時の自分の姿を。それがわかれば早苗のそうした態度もわかったかも知れない。いや、まだ彼女には無理であるうか。「何かあったのかな、今日」

その何かにも気付いていないのである。そのことに関して全く知らない者はある意味において無敵である。何故なら恐れも全く知らないからである。

自分のことより早苗のことを考えはじめた。そこで部室の扉が開いた。

「誰!？」

「私よ」

声は早苗のものだった。それを聞いた洋子は身構えかけていたがそれを解いた。

「何だ、よかった」

そう言つて安堵の息を漏らす。

「あいつかと思つたじゃない。驚かせないでよ」

「驚きたかつたの?」

「まさか」

それには首を横に振つた。

「馬鹿なこと言わないでよ」

「まあそうだけれどね」

やはり早苗の態度は素っ気無かつた。そして彼女は素っ気ないまままた言つた。

「それで彼だけれど」

「どうなったの!？」

洋子は思わず身を乗り出してきた。

「まだいるの!？」

「いいえ」

早苗は首を横に振つて答えた。

「もういないわ。安心して」

「そう」

ほっとしたような、がっかりしたような顔であった。

「よかった」

「よかったのね」

「勿論よ」

迷わずにそう答えた。

「これで明日から元の生活に戻るんだから。清々したわ」

「そう。それじゃあいいわ」

早苗は感情の抑制のない声でそう述べた。

「じゃあ帰りましょう。もう暗いし一緒にね」

「ええ」

こうして二人は部室を出た。確かにもう暗くなっていた。

洋子はその暗くなった学校を見回していた。そしてある程度見回したうえでほっと安堵の息を漏らした。

「これでいいわ」

「いいのね」

「うん。今まで鬱陶しくて仕方がなかったのよ」

その大きな目を少し怒らせて言った。

「うざくて。私の他にもどうせ声をかけまくってるんでしょうけれど」

「今はそうじゃないらしいわ」

「そうなの」

「稲富君ね、一人の女性に声はかけるけれど二人の女性には声をかけないのよ」

「そうだったんだ」

「だから今声をかけていたのは洋子だけなのよ」

「ふうん」

それを聞いて何故か複雑な気持ちになった。

「そうだったんだ」

「どうかしたの？」

「え、いや」

それを聞いて慌てて首を横に振った。

「何でもないわ、何でも」

「わかったわ」

「もういなくなつたし。これで勉強にも部活にも専念できるし」

「そうね」

「ねえ、前から行きたかつたラーメン屋さんがあるのよ。一緒に行かない？」

「いいわよ」

「それじゃあ今から行きましょう。とっても美味しいんだって」

洋子は朗らかな声で早苗を誘って学校を後にした。そこに友一はいなかった。それが洋子にとってはこれ以上ない喜びであった。今のところは。

## 第五章

そうした日が数日続いた。やはり友一は洋子の前に姿を現わさない。登校中も休み時間も部活の時も。下校の時にもだ。あれだけつきまといつていたというのに本当に消えてしまったのである。

「どうということなんだろう」

それがかえって不気味に感じられた。

「本当にいなくなるなんて」

いざいなくなると何だか落ち着かない。暫くいつも側にいたからこれは当然であった。洋子はそれを何か次第に物足りなく感じはじめていたのだ。

「どうかしたの？」

そこに早苗が声をかけてきた。

「落ち着かないみたいだけれど、最近」

「別に」

洋子はそう言ってしらばっくれようとした。

「何でもないわ」

「そうなの。じゃあいいわ」

「ええ」

そしてまた数日経った。やはり姿を現わさない。洋子はさらに不安になった。落ち着かなくなつて仕方がなかった。

「ねえ早苗」

洋子はたまりかねて早苗に声をかけてきた。

「何かしら」

「あいつのことなんだけれどね」

「あいつ？」

「あいつよ」

洋子は言った。

「あいつ。今何処にいるのよ」

「洋子、あいつじゃわからないわよ」

焦りだす洋子に対してあえて冷静な声をかけたようであった。

「誰なのかしら、そのあいつという人は」

「知らないの？」

「名前を言われないと」

「………稲富君よ」

彼女は仕方なくその名前を口にした。

「どうしたの、最近。全然見ないけれど」

「貴女が言う通りにしたのよ」

「どういふこと！？それって」

「だから言ったのよ、彼に」

「何て」

「もう絶対に貴女の前に姿を現わさないようにって。きつくね」

「きつくって。それって」

「一番わかり易いようにしたわ、彼にとって」

あまり多くを語らずそう述べただけであった。

「それだけよ」

「だから見ないのね」

「ええ」

「二度と？」

「そう、二度とよ」

早苗は断言した。

「何があってもね。絶対に姿を見せることはないわよ」

「そうなの」

それを聞いて寂しい顔になった。

「彼、絶対に私の前に姿を現わさないのね」

「ええ」

「あれだけ声をかけて側にいたのに。もう絶対に」

次第に悲しさまでその顔に帯びてきた。

「それがどうかしたの？」

早苗はそんな彼女に声をかけてきた。

「貴女が願ったことじゃないの、それは」

「それはそうだけれど」

それでも悲しい顔は元には戻らなかった。

「けれど」

「けれども何も無いわ」

早苗は突き放すようにしてそう言った。

「貴女が私にそう言ったから。それで私は貴女の願いを彼に伝えた  
だけなのよ」

「そうなの」

「そうよ」

何故かその声が極めて冷たいものに感じているのを洋子は感じて  
いた。

「貴女彼が嫌いで仕方なかったのでしょうか？」

「ええ」

「だったらこれでいいじゃない。違うかしら」

「うん」

一度は頷いた。

「それでいいわね」

早苗は洋子に念を押した。

「全部終わりで。納得しているわね」

「納得……」

洋子はこの時俯いていた。そして心の中にあるものを見ていた。

それは自分自身のことであった。

「どうなのかしら」

「それは」

次第にわかってきた。何故自分が今寂しい思いをしているのかを。  
悲しい気持ちを含んでいるのかを。そして何故彼と合って顔を赤く  
させたのかを。全てを理解した。

「……ええと」

洋子は戸惑いながらも言葉を出した。

「早苗」

「何かしら」

早苗は顔を変えずに洋子に対して問う。

「あのね」

洋子はおもいおもいとしていた。普段の気の強いきはきとした感じは何処にもなかった。少なくとも友人に対するようなそれは全く見られなかった。

「彼、学校には来ているのよね」

「勿論よ」

早苗は静かにそう答えた。

「毎日ちゃんと来ているみたいね」

「そう、よかった」

それを聞いてまずは安心した。

「それでね、早苗」

洋子は言おうとする。だが言葉が中々出ない。

「あのね、えっと」

「言いたいことはわかってるわ」

しかし早苗はそんな彼女に対して優しい声をかけてきた。見ればその顔も優しげであった。

「稲富君のことよね」

「………うん」

こくり、と頷いた。その小さな可愛らしい顔を赤くさせている。

「どうしたいの？」

「それは………」

「言いたいことがあるのなら言ったら？」

急に突き放した調子になった。それでも洋子は言う。

「あのね」

おもいおもいながら言葉を出す。

「うん」

「彼にね、伝えて欲しいの」

「何て？」

「この前のことだけねど」

「何のことかしら」

「覚えていないの？」

「さて」

わざとらしくとぼける。しかし洋子はそれを見てさらに焦ってきた。

「覚えてないのね、あの時のこと」

「言われないとわからないから」

「わかったわ。この前部屋で貴女にお願いしたことだけねど」

「そういうこともあったかしら」

「忘れてるみたいだから言うけれどね」

次第に泣きそうな顔になってきた。早苗はそれを黙って見ていた。優しい様子もあえてかどつかはわからないが消してしまっていた。

「ほら、彼にもうつきまとなって言うてくれってお願ひしたでしょ」

「そういえやそうだったわね」

思い出したように頷く。

「そのことだけねど」

「うん」

「取り消せないかなあ。ほら、あいつだって寂しいでしょうし」

顔を早苗から背けながら言う。俯いてもいるのでその表情は全然わからない。だが顔を真っ赤にさせているのはわかる。手までそうだからだ。残念ながら耳等はその黒くて長い髪の毛で見えはしなかった。

「私は我慢してあげるから。少し位なら側に来てもいいよって。伝えてくれるかな」

「それでいいのね」

「・・・うん」

顔を背けたままこくり、と頷く。

「お願い」

「わかったわ」

早苗はそれに頷いた。

「じゃあ明日ね。今から彼にそう伝えておくから」

「お願いできる？」

「ええ。それでいいのね」

「うん」

洋子は同じ姿勢のまま頷いた。そしてその時はそれで終わった。

洋子は家に帰って風呂に入った。そして浴槽に浸かりながら友一のことを考えていた。

「どうなるのかな」

今までのことも思い浮かぶ。いつもまとわりつかれ迷惑だったがいざ急にいなくなるとやはり寂しい。いや、寂しさ以上のものも感じていた。心が次第に苦しくなりだしていたのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

次第に考えが深くなりそれはベッドの中でも続いた。夢にはやはり彼が出て来た。しかしどういうわけか前のそれよりは遥かに受け入れ易いものであった。内容はさして変わらないというのに。それが極めて不思議ではあった。

翌朝身支度を整え家を出る。普段よりお洒落をしている気持ちはある。ブローチもいつものより可愛いものにし、顔も念入りに洗った。そして靴下も新しいものだ。何処か身構えていた。

「さて」

辺りを見回す。彼はまだ来てはいなかった。

## 第六章

見回した後で学校に向かう。今までならそろそろ声をかけてきただがそれはまだなかった。

「・・・・・・・・駄目だったのかな、早苗」

それを見てふとそう思った。思うと気分が暗くなった。

「やっぱり。私の我が侘通りにはいかないか」

俯いてしまった。そしてそのまま学校の校門へ歩いていく。そこまでもあの声はなかった。

校門に辿り着いた。やはり声はなかった。それを確かめて洋子はふう、と溜息をついて顔をあげた。結局こうなってしまったのは自分のせいだと思いながら。

「お早う、洋子君」

「えっ!？」

だがそこで声がした。見れば校門の方からだ。

「待ってたよ、お早う」

「稲富君」

洋子は友一の姿を認めて目を点にさせて驚いていた。

「いたの」

「ずっとここで待ってたんだよ」

「何で!？」

「だってここには絶対に来るから。そうじゃないの?」

「・・・・・・・・まあ確かにね」

言われてみればその通りである。学校に入るにはここをぐるしかないのだから。少し考えれば誰にでもわかることではあった。わからなかったのは洋子自身が他のことを考え過ぎていたからであった。

「だから待っていたんだよ。驚いた?」

「別に」

何処か普段の調子を取り戻せてきていた。目を細くさせてそう返す。

「よく考えれば当たり前のことだし」

「そうだったかな」

「大体何であんたがここにいるのよ。どういつつもりなの？」

「そんなことわかってるじゃないか」

彼はにこやかに笑いながら洋子に近付いて来た。

「洋子君の側にいたいからに決まってるじゃないか」

「だからそれは前から言ってるでしょ」

きつい調子で言うが今までのように完全にきつくはなかった。

「私はお断りよ。どうして私にまわりつくのよ」

「洋子君の側にいたいからさ」

「だから私は嫌なの」

「そう言わずに」

「先生」

たまりかねて校門の前に立っている生活指導の先生に声をかけた。見れば大柄だがあまり迫力はない。この先生は身体は大きいが心優しい先生として知られている。元々校則の厳しくない学校でありこの先生も決して厳しい先生ではなかった。だがそれでも洋子は言った。

「先生からも何とか言ってお下さい」

「そうは言ってもなあ」

だが先生はあまり乗り気ではなかった。

「稲富、不純異性交遊だけはいかんぞ」

「わかってますって」

彼はそれに答えながら洋子にまた近付く。

「僕達高校生ですから。まずは日記の交換から」

「何で日記の交換なのよ」

「お互いのことを知りたいじゃない。ほら」

「面倒臭い、馬鹿馬鹿しい」

そう言つて拒絶しようとする。だがここでノートが前に出されてきた。

「僕は書いたからさ、今度は洋子君が」

「私は嫌なのよ」

「そう言わずに」

「嫌だつて」

「一日だけ。一行でもいいから」

「……まあそれ位なら」

ちらりと片目で友一を見ながらそれに応えた。

「いいわ。書いてあげるから感謝しなさい」

「本当!？」

友一は洋子にそう言われ飛び上がらんばかりに喜んだ。

「やっと洋子君が愛の告白を!やったあ!」

「おつ、稲富に遂に彼女が!？」

「御相手は川口か」

「な、ななななななななななな」

丁度そこに登校して来る同級生達に言われ洋子はその顔を真っ赤

にさせて手を大きく振り回してそれを否定しようとする。

「私はそんなこと」

「交換日記してくれるなんて。夢みたいだ」

「だからそれは一日だけだつて言ってるでしょ!」

「その一日が二日になり三日になりやがて……」

「何かいい話だなあ」

「冗談じゃないわよ、どうしてそうなるのよ!」

「だって今交換日記するつて言っただろ」

「それはこいつがあんまりしつこいから……」

「けどやるんでしょ」

「仕方なくよ!何で皆そうやって私とこいつを……」

「顔が真っ赤なのが何よりの証拠」

「あんたが言うな!」

顔を真つ赤にさせたまま友一を追って学校に入る。だが逃げる友一にも追う洋子にも本当に逃げたり追い掛けたりする様子はなかった。何処か楽しんでいた。

「うまくいったみたいね」

早苗はそんな二人を自分の教室から見ながら一人呟いていた。

「本当に。世話が焼けるんだから」

そう言つて一人苦笑した。そしてあの時のことを思い出していた。

「あれ、洋子君は？」

その時友一は洋子を待つて部室の側で待つていたのだ。そこに早苗だけが来たから残念そうな声を出したのだ。

「君には悪いけれど用はないんだ。御免ね」

「前は用があつたのにね」

早苗はそんな彼の言葉を笑つて送り返した。

「あの時のこと？」

「ええ」

彼女は頷いた。

「私に振られて次の日にはもう別の女の子に声をかけていたわね」

「まあね」

友一は悪びれずそれに頷いた。

「あの時はね。それでいいと思つていたんだ」

「あの時は？」

「ああ。今はね、違うけれど」

「違うの」

早苗はそれを聞いて少し考える顔をした。

「それは洋子のことね」

「うん」

「じゃあ洋子のことは本気だと思つてもいいのかしら」

「今までだつて本気だったよ」

彼はそう言い返した。

「君のことだつて。あの時は本気だつたんだ」

「そうだったの」

「何かね、好きな人がいると。言わずにはいられないんだ、昔から  
「けれど振られたらそれでお終いなよね」

「今まではね。けれど洋子君に気付いた時は全く別だつたんだ」

「別だったの」

「そうさ」

彼は答えた。

「何か。本当に一目見た時から振られてもいいと思つたんだ。何度  
でもアタックしてやるつて」

「それで今まであの娘につきまといつていたのね」

「つきまといつてるつもりはないよ」

真剣な顔で首を横に振つた。

「ただ……好きだけなんだ」

「本当に好きなのね？」

「うん」

そして頷いた。

「本当なの？」

「何度でも言つよ。好きなんだよ。好きだからいつも何時までも側  
にいたいんだ」

「そうなの」

「そうさ。洋子君がいれば他には何にもいらないんだ。彼女が振り  
向いてさえくれたら僕は他のものはいらぬ。彼女だけが欲しいん  
だ」

「彼女と付き合いたいのね」

「だから言つてるじゃないか。それも一生」

「一生ね」

「ああ。何があつても離れたくはないよ。彼女と一緒にいたいんだ」  
「わかつたわ」

早苗はそれまで聞いてようやく頷いた。

「今までみたいないな軽い調子だったら容赦なくここでひっぱ叩いて二度と洋子に近寄せないつもりだったけれど」

「そうだったの」

「ええ」

見ればその目は本気であった。嘘は一切なかった。

「けれど今の貴方を見て安心したわ。どうしても一緒になりたいのなら方法があるわ」

「それは一体」

「ずっと一緒にいたいよね」

「うん」

彼はまた頷いた。

「じゃあどんなことにも耐えられるわね」

「勿論」

「わかったわ。じゃあ私にいい考えがあるわ」

「それは一体」

「稲富君、洋子から離れなさい」

「えっ!?!」

友一はそれを聞いて口を大きく開けさせた。

「今何て」

「聞こえなかったの？洋子から離れなさいって言ったのよ」

「けれどそれって」

「矛盾はしないわ。いい、暫くあの娘の側に出ないだけでいいのよ」

「暫くってどれ位？」

「私がいいって言うまでよ。それとも我慢できないっていつの？」

「それは……」

そのスラリとした長身を俯けさせた。どうやら彼にとっては思いも寄らぬことであつたらしい。

「ちよつと……」

「ちよつと……何かしら」

「他のでよくないかな。やっぱり僕は」

「じゃあ洋子は側にいて欲しくないのね」

「それも困るよ。だからね、僕は洋子君と何時までも何処までもずつと一緒になりたいんだよ」

「じゃあいいじゃない。少しの間だけ我慢すれば」

「それはできないよ」

「これで絶対洋子が貴方のことを好きになっても駄目かしら」  
「好きに!？」

それを聞いた友一の耳も目も動きもあらゆるものが止まった。心ですら止まってしまった。

「洋子君が僕のことを好きになってくれるの!？」

「ええ」

「本当に!？」

「本当のことよ。私が言うのだから間違いはないわ」

「嘘みたいだ、その言葉」

それを聞いただけでも夢の中にいるような気持ちになった。洋子が自分のことを好きになってくれる。それを思うだけでもう頭の中がそのまま天国へ行ってしまうそうであった。

「本当に本当なんだね」

「信じられないっていうの!？」

「そりゃ。僕は確かに洋子君が好きだけれど」

「彼女は貴方のことが嫌いだものね」

「うん。残念だけれど」

ここで早苗はあえて洋子の細かい心の動きは言わなかった。その仕草や表情からおおよそのことは見当がついていたがそれも言わなかった。その方がいいと思ったからだ。

「それが何とかなるんだったら。僕は何でもするよ」

「それがその離れることなのよ」

「そうなの」

「どう?やってみる?」

「ううん」

軽い男 堅い女

た。  
暫く腕を組んで考え込んだ。だがやがてその固く閉じた口を開い

## 第七章

「絶対に成功するんだね」

「ええ」

洋子のことなら何でもわかつている。あの様子からして間違いはなかった。そしてそれをどうにかするには揺さぶるのが一番だ。そう判断したうえでのことだった。絶対の自信があった。

「それは任せて」

「それじゃあ」

「やるのね」

「うん」

彼はまた頷いた。

「それで洋子君が振り向いてくれるのなら。やるよ」

「わかったわ」

それを聞いて早苗も頷いた。

「それじゃあ今はもう帰って。そして私がいいって言つまで彼女の側には近寄らないこと。いいわね」

「うん」

「これで決まりね。それじゃあ今からはじめるわよ」

「わかったよ。じゃあね」

「ええ」

それから暫く経った。早苗は友一をこっそりと学校の屋上に呼んだ。

「その暫くなんだね」

「そうよ」

早苗はそれに答えた。何もない学校の屋上では二人の他には誰もいなかった。その二人だけの間で話をした。見ているのは空にある雲、そして二人の周りを吹く風だけであった。

「明日の朝にね。いいわね」

「うん」

彼は力強く頷いた。

「これでなんだね。待ったかいたよ」

「まさか待てるとは思わなかったわ」

早苗は一目見ただけで露骨に嬉しそうな様子の友一に対してそう述べた。

「それはね」

友一は彼女に対して答えた。

「洋子君が僕を好きになってくれるのなら。我慢したんだよ」

「そうだったの」

「本当にこれでいいんだね」

「ええ」

早苗は頷いた。

「洋子君が僕と一緒に。何か夢みたいだよ」

「夢じゃないわ、本当のことよ」

早苗は舞い上がりながらばかりの様子の友一に対してそう答えた。

「だからそれは安心していいわ」

「本当に本当のことなんだね」

「だからそうだって」

何度も言われて苦笑せざるをえなかった。

「そんなに信じられないの？」

「そりゃまあ。だってね」

「わかるわよ。すぐにね」

「そうかな。何か不安だよ」

「私だって不安よ」

「何で!？」

「貴方のことがよ」

そう言って友一を見上げた。女の子としては背が高いがそれでも友一よりは低かったのである。

「確かに今の貴方は今までの貴方とは違うみたいだけれど」

「うん」

「大丈夫なの？何か凄く不安なのよ」

「不安？」

「そうよ。浮気なんかしないでしょね」

「そう言つてその細い眉を顰めさせた。」

「もしそんなことしたら許さないからね、絶対に」

「許さないって」

「私だよ。洋子を悲しませたり泣かしたりしたら唯じゃおかないから。それはわかつてるんでしょね」

「それはわかつてるつもりだけれど」

「だったらいいわ。じゃあ信用していいわね」

「うん」

彼は頷いた。

「任せてよ。洋子君から絶対に離れたくはないから」

「わかつたわ。じゃあ信じてあげる」

「有り難う」

「けれど洋子を裏切つた時は」

「その首筋を掴んだ。そして下から見上げる。」

「わかつてるでしょうね」

「う、うん」

そんなやりとりがあつたのだ。早苗は今その時のことも思い出していた。

「幸せになりなさいね、洋子」

優しい顔で洋子に対してそう声を送つた。だがそれは洋子本人に

は全く届いていなかった。

「待ちなさいよ！」

「待つたら何かくれるの？」

「拳骨あげるわよ！だから待ちなさい！」

「拳骨なんかいらぬな」

「じゃあ何が欲しいのよ」

「洋子君の日記が欲しいな。毎日交換してよ」

「それじゃあそこになおりなさい！」

「うん」

「覚悟！」

そこに洋子の鞆が飛んで来た。しかしそれは友一に受け止められてしまった。

「なっ」

「洋子君の癖はもうわかってるから。これ位はね」

彼はにこやかに笑ってそう言葉を返した。

「もう何でもないさ」

「は、離してよ！」

逆に捕まってしまった洋子は必死に鞆を取り返そうとする。しかしそれはかなわなかった。友一はその長身を生かして小柄な洋子の手の届かない場所に鞆を持ち上げていたのだ。

「返して欲しい？」

「それがないと何にもできないじゃない！その日記だって……  
・あ」

ここで取り返しのつかないことを言ってしまったのがわかった。

「しまった……」

顔がまた赤くなっていく。そして動きも止まってしまった。

「それじゃあ毎日つけてくれるんだね」

「え、ええ」

彼女は頷くしかなかった。自滅してしまったのを認めざるを得なかったからだ。

「よかった。それを待ってたんだよ」

「仕方ないわ」

洋子は懨然としてそう返した。

「こうなったら。毎日よね」

「うん。交代でね」

「いいわ。じゃあそれで」

「もう一つお願いがあるんだけど」

友一は洋子に鞆を返しながら言った。

「何かしら」

「デートしてもいいかな、これから登下校の間」

「何で？ずっと前からつきまといつてたじゃない」

「そうじゃなくてさ。今度は二人で」

「……もうしてるじゃない」

「じゃあいいんだね」

「ええ」

彼女はそれに頷いた。

「仕方ないわ。ただし」

「ただし？」

「あまりベタベタしないでよね。私だって恥ずかしいんだから」

少し友一から間を置いた。そして腕を組んで無理に照れを隠しながらそう言った。

「わかってよね、それは」

「僕は恥ずかしくはないよ」

「私は違うのよ」

「いいじゃない。今までもそうだったんだし」

「あれはあんたが」

「駄目かな、やっぱり」

「え……」

友一は洋子の否定的な様子に少し寂しい気持ちになったようであった。

「僕、洋子君と一緒にには歩いちゃ駄目なのかな、やっぱり」

「そ、そんなこと言ってないじゃない」

洋子は慌ててそれを否定した。

「だからね、節度を持って欲しいのよ」

「節度を」

「あんまりベタベタしなかったらそれでいいから。ね、それでいい」

でしょ」

「じゃあ一緒にいいんだね」

「だから仕方無いじゃない、こうなったら」

また仕方無いと言った。

「あんたと付き合っつてことになったんだから。覚悟を決めたわ」

「覚悟を？」

「ええ。はっきり言うわ、こうなったら」

そう言っつて友一に向き直った。

「付き合っつてあげるわ。感謝しなさい」

「有り難う、洋子君」

「本当に。負けたわよ」

苦笑してそう言う。

「こうまで押しが強いと。それで急にいなくなっっちゃうし。そんな

ことされたら困っっちゃうじゃない」

「恋は焦らず」

「焦らず？」

「あるドラマの題名だけれどね」

「古いわね」

早苗はそれを聞いてそう呟いた。

「そう思ったから。離れたんだよ」

「嘘仰い」

だが早苗の言葉は二人には届かない。ましてや友一の耳には。

「私のアドバイスじゃない」

「そして私はそれに釣られたのね」

「けれど本当に嫌だったらそれで終わりだったよね」

「まあね」

それも認めざるを得なかった。

「本当に。それで終わりだったのに」

「終わらなかつたね」

「そうね」

嫌そうに言うがその顔は笑っていた。

「それじゃあこれからはじめようよ」

「気が乗らないけれどね」

「まあまあ」

「やっとな」

早苗はそんな二人を見てさらに言う。

「世話が焼ける二人だこと」

そこまで言うのと窓から姿を消した。そして彼女もふと思うことがあった。それは何か。本音である。

「私も何時か」

彼女は思った。

「洋子みたいになりたいな」

これが本音であった。

軽い男 堅い女 完

2005・10・9

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4823a/>

---

軽い男 堅い女

2008年11月7日08時10分発行